野生動物との共生の社会的課題

――キタキツネの餌付けから考える――

麻布大学　塚田英晴

ヒトと野生動物との関係を考える上で、野生動物の餌付けは避けては通れない問題である。野生動物とは、その名の通り「野生の」状態で暮らす動物を指し、ヒトからの様々な介入が及ぶ「畜産動物」や「愛玩動物」などとは対局をなす。野生動物以外の動物との対比に注目すると、野生動物は、「移動」「繁殖」「採食」などの活動の自由が人間によって制限されていない動物とみなすことができる。こうした自由の制限は、段階的に変化する。そのため、同じ動物種が、置かれている状態により別の動物として認識されることもある。

例えばネコを例に取ると、外飼いネコのように「採食」活動をヒトからの餌に依存する場合、「繁殖」と「移動」の自由は制限をされていないものの、「愛玩動物（ペット）」とみなされる。しかし、無人島で自由に野生動物を狩って暮らすネコなどは、「ノネコ」と分類され、鳥獣保護管理法の下では狩猟獣に、生物多様性の点からは侵略的外来種のひとつに位置づけられる。一方、餌付けられた野生動物は、「採食」活動の一部を外飼いネコのようにヒトに依存し、さらに、餌をもらうためにヒトに対して寛容な行動、いわゆる“人馴れ”した行動変化を示す。そのため、餌付けられた野生動物は、"野生動物らしくない”もしくは“家畜のような"動物に誤認されやすいと考えられる。観光客による餌付けが行われていたキタキツネを材料に、北海道の知床国立公園で観光客にアンケート調査を行ったところ、キクキツネに餌を与えた観光客には野生動物を個体として認識する傾向が、逆に餌を与えなかった観光客には、野生動物を種として捉え、生態学的態度を示す傾向が認められた。ある意味、キタキツネを野生動物として感じる観光客は餌を与えなかったといえる。餌付けられたキタキツネについては、食性全体に関しヒトへの高い依存こそ示さなかったものの、冬期に隣接する人口集中地域へ遠征しており、ヒト由来の餌資源を積極的に活用する行動変化を示した。その結果として、キタキツネの観光客による餌付けが、キタキツネが媒介する人獣共通感染症であるエキノコックス症のヒトでの発症リスクを高める要因となっていた。

さらに、野生動物の餌付けには、観光客による餌付けのような行為者の意図が明確な「意図的餌付け」だけでなく、給餌者が必ずしもその行為自体を十分には認識していない「間接的餌付け」と呼ばれるものも存在する。北海道を代表する大都市である札幌市では、199.0 年代以降、市街地でのキタキツネの生息が一般化しつつあった。1998 年に市街地で交通事故死したキクキツネの胃内容を分析したところ、食性の 4 割近くを残飯など人間由来の食物に依存していた。こうした住民による無意識でのキタキツネの餌付けがキタキツネの市街地での生息を可能にし、市街地に生息するキツネ家族の約 6 割がエキノコックスに感染するハイリスク状態を招く一因にもなっていた。

野生動物を身近な環境に定着させ、重複した生活圏内での共生を可能にする点では野生動物の餌付けは一定の役割を果たす。しかしそうした利益の一方で、野生動物由来の感染症をヒトに媒介するリスクを高める危険性もある。このように、野生動物との共生は、一定のコストを無視できない、いわばトレードオフの関係にあることを認識する必要がある。